

ジャバラ

1. 原生地と産地形成

1) 原生地と伝播

ジャバラは、和歌山県と三重県の県境を流れる熊野川の支流、北山川を挟んで、和歌山県東牟婁郡北山村竹原地区及び三重県熊野市神川町花知地区に、江戸時代から存在していたと考えられている。これらの地域では古くから庭先果樹として栽培され、食酢用に利用してきた。

昭和 46 年に北山村出身の福田国三の依頼により、田中諭一郎が現地調査を行い、これまでに記録のないユズの血を引くカンキツであることを確認した。ジャバラは現地で古くから呼んでいる名で、紀州では古くからカラタチをジャケチと称する地域があり、これと区別するためジャケツイバラと呼んでいたが、これが訛って「ジャバラ」になったと推測されている。また、「邪を払う」に由来するともいわれる。昭和 54 年に福田国三の申請により種苗法に基づき品種登録がなされた。品種名は平仮名で「じゃばら」である。

2) わが国における栽培概況

和歌山県の北山村では古くから庭先果樹として植えられ、正月用のさんま寿司、昆布巻、のり巻を作る時に果汁を利用してきた。山村の林業の構造的不況、過疎化が深刻化する中で、昭和 50 年にはわずかな面積でジャバラの栽植が行われたが、昭和 54 年の品種登録を契機に産地化が進められ、「ジャバラ振興会」が組織された。昭和 54 年から団体営農地開発事業により、11.5ha の造成（植栽面積 8.6ha）に着手、昭和 58～60 年にかけて 3～5 年生の苗木 12,000 本を植栽し、昭和 60 年から収穫を開始した。当初は収益性の高い生果での出荷を目指したが、他の香酸カンキツとの競合もあり、販路拡大には難しい面があった。昭和 63 年にはジャバラ加工施設ができ、地元の婦人グループが中心になって加工品の開発が進められ、観光と結びつけた販売が行われている。

平成 15 年の栽培面積は 10.1ha、生産量は 80t、主産地は和歌山県北

山村で 10.0ha であり、他に三重県で 0.1ha 栽培されている。

2 . 分類と品種

ジャバラは、ミカン科、カンキツ属に分類される。田中諭一郎はユズの血を引くカンキツであるとし、*Citrus jabara hort. ex Y. Tanaka* の学名を与えている。

本種は、スウィングル (W.T.Swingle) の分類によるカンキツ属の 16 種及び田中長三郎の分類による 162 種の中には含まれていない。なお、利用上は酸味が強く独特の香りがあることから、香酸カンキツあるいは酢ミカンとして扱われている。

ジャバラは、昭和 54 年に種苗法に基づき品種登録され ' じゃばら ' 以外に、枝変わり等による系統・品種は育成されていない。

3 . 形態と生理・生態

1) 形態

(1) 樹の特性

樹は高木性で、樹齢を経ると樹高は 5m 位に達する。樹勢はやや強で、若木の間は直立性が強いが、結果期に入ると開帳性となり、楕円形の樹姿となる。耐寒性は強い。病虫害の発生は比較的少ないが、そうか病の発生しやすい所では防除が必要である。

枝梢の太さは中位で、やや密生し、トゲはない。枝の分岐角度は狭い。幼梢、幼葉は紫色を帯びる。葉身は楕円状披針形で、長さ 8~10cm、幅 4~4.5cm 程度である。葉身の先端部は鋭尖形、基部は鈍形ないし鋭形である。翼葉は楔形でユズより小さい。

花は通常単生するが、まれに総状花序を形成する。花蕾は長さ 1.8cm 程度で、淡紫紅色を帯びる。花弁は 5 枚、長さ 1.8cm 程度で長楕円形である。雄ずいは 25 本内外で合着している。花粉量は中程度で稔性があるが、自家不和合性を示す。単為結果性がある。

(2) 果実の特性

果実重 160~200g、横径 7.0~7.5cm、縦径 6.5~7.0cm、果形指数 110 程度でほぼ球形である。果頂部、果梗部の形状はともに球面状ないし平らである。果頂部にはやや明瞭な凹環と数本の浅く短い放射条溝がある。果梗部には数本の太く明瞭な放射条溝がある。

果皮は黄橙色で、油胞はやや大きく凹んでおり、その分布は中で果面は粗い。果皮の厚さは 4~5mm で剥皮は困難である。果皮にはユズとクネンボのような独特の香りがあり、わずかな苦味がある。果肉は黄~橙黄色で柔軟多汁である。着色果の搾汁率は 42% 程度あり、ユズに比べて高い。

じょうのう数は 12 程度で、香酸カンキツとしては多い。じょうのう膜の厚さは、中程度でわずかに苦味がある。果心の大きさは、約 1.3cm で充実している。果汁の糖度は 11% 程度、酸含量は 4.5~5% である。果汁にも独特の風味がある。含核数は普通 0~2 粒であるが、受粉を行うと 20 粒程度入る。種子は単胚性である。

2) 生理

結果期に達するのは4~5年生で、ユズより早い。樹の生長サイクルは一般のカンキツと大差ない。

果実の肥大は10月下旬まで続き、160~200gとなる。玉揃いは余りよくない。果皮の着色は11月上旬に始まり、12月にかけて成熟期となる。果実の着色が進み成熟期にならないと、果汁が十分貯まらない点はユズと異なっている。収穫時期は、北山村の現地では6分着色程度になった11月中旬~12月上旬であるが、凍霜害が回避できる所では1~2月の収穫も可能である。ジャバラは貯蔵性も高く、3月頃までの常温貯蔵が可能である。

3) 気象と土壌

ジャバラはかなりの耐寒性があると思われる。果実の収穫は、6分着色程度になった11月中旬から、霜による被害が現れる前の12月上旬までに行われるので、特に果実の耐寒性が問題になることはない。適地の温度条件はユズ程度と思われる。しかし、幼木時には十分な防寒対策が必要である。

夏期における土壌水分の不足は、樹勢を低下させ果実肥大を悪くする。また、冬期に土壌が乾燥し、低温が続くと寒風害による落葉を助長するので、特に夏期と冬期は、降水量が不足しない所が適する。土壌条件は有効土層が深く、腐植に富み排水のよい所がよい。土壌酸性度はpH6程度の弱酸性が適する。日照量が多く、冷気の停滞しない緩傾斜地あるいは平坦地が望ましい。

4 . 栽培管理

1) 栽植

台木はカラタチが用いられるが、特に問題は生じていない。早期に収益を上げるためには大苗を用いて計画密植栽培を行い、その後間伐を行うのがよい。栽植時の樹間距離は、普通 2.5m 程度である。植え付け適期は発芽前の 3 月中旬～4 月上旬である。植え付け方法は他のカンキツと同じである。

2) 剪定・整枝と摘果

剪定は開心自然形を基準に行うのがよい。かなり直立性が強いので、誘引を主とした整枝を行い、樹高を低くして、低い位置に結果層のある樹形に仕立てる。枝の分岐角度が狭いので、誘引を行う時は枝が裂けないように注意する。

収穫期が 11 月中旬～12 月上旬と比較的早いいためか、翌年の着花数は比較的多い。しかし、自家不和合性で、単為結果性があるものの結実率が比較的低い。そのため、現在現地では摘果は行われていない。連年安定した生産を行うためには、多く着果した場合には、摘果が必要である。

3) 病虫害防除

病虫害の発生は比較的少ないので、栽培は容易である。防除対象となる病虫害は黒点病、そうか病、ミカンハダニ、サビダニ、訪花昆虫、ゴマダラカミキリ等である。幼木期のミカンハモグリガ、アブラムシの防除は重要である。なお、山間地での栽培ではシカ、ウサギによる食害対策も必要になる。

5 . 消費

生果、果汁は寿司の合わせ酢、湯豆腐、鍋料理等の各種料理に食酢として用いられる。生産物の9割は、加工所で加工品の製造が行われている。加工品の種類はドリンク、ポン酢、マーマレード、ジャム、麺つゆ、しゃぶたれ、果汁（100%）の他、ジャバラワインがある。